

【令和3年度農業大学校 重点目標】実績と評価（自己評価）

	重点目標	評価指標	具体的方策	実績(基準日:2月1日)	自己評価	次年度に向けて	添付資料等
1	多角的な学生募集活動の推進による入学者の増加 (教務課、養成部、研修部)	◎令和4年度入学者 40名 (R2実績:30名)	(1)学生募集PR版の作成 (2)農大キャラバン隊の県内高校訪問による学生募集(6月) (3)各高校の進路ガイダンスへの参加による農大PR (4)農大オープンキャンパスの開催(5月、10月) (5)農大体験カレッジの開催(7月) (6)高校職員向けオープンキャンパスの開催(8月) (7)農高・農大連携会議の開催による情報共有(6月、2月) (8)農高主催の民間講師招聘事業への講師派遣 (9)農業高校の保護者へ農大PRのプリントを作成し全員に配付。 (10)各農業高校の協力の下、保護者会等において説明し農大PRを行う。 (11)各農業高校と連携し、高卒即就農希望者(雇用就農を含む)に対し、農大進学への誘導を図る。	【実績】入学予定者数:38名(1次試験まで) 【活動状況】 (1)学生募集PRポスターとパンフレットを作成した。 (2)県内の高校訪問した。73校(6月～7月) (3)高校主催ガイダンスへ参加した。4校 (4)5月のオープンキャンパスはコロナ禍により中止した。 (10月)参加者14名 (5)農大カレッジを開催した。(7月)参加者36名 (6)高校職員向けオープンキャンパスはコロナ禍により中止した。 (7)農高・農大連携会議を開催した。(6月、2月) (8)農協や市町など関係機関を訪問した。(6月～7月)46ヶ所 (9)コロナ禍により各農業高校の保護者会に参加できなかった。 (10)農業高校の全保護者へ農大PRのプリントを作成し配付した。 (11)高校生の体験実習を受け入れた。5校	(教務課長) ・新型コロナウイルスの影響により、中止や予定変更を余技なくされた行事が多数あったものの、ほぼ募集定員の40名を確保することができた。(2次募集を除く) ・オープンキャンパスや農大カレッジ等を実施し、全職員で学生募集に努めた。 ・高校訪問においては、7月までに全て完了し、入学生の増加を目指した。 ・県内全ての農業高校に在籍している保護者向けに農大PRのプリントを配付することができた。 (養成部長) ・オープンキャンパスや農大カレッジ等では、各学科において、高校生に興味を持ってもらえる内容となるよう工夫した。 ・農高への出前講座や体験学習で学科のPRを行った。	(教務課長) ・農業高校の保護者の認知度を高めるため、各農業系高校の協力の下、保護者会等において説明し農大PRを行う。説明会が不可の場合はプリントの配付を依頼 ・農業高校と連携して高卒即就農希望者に対し、農大進学への誘導を図る。 ・新寮建築や学科編成等農大リニューアルに関する内容を、県内全高校生に向けて周知徹底、PRに努める。 (養成部長) ・オープンキャンパスや農大カレッジ、出前講座、体験学習など、高校生と接する機会において、農大に興味を持ってもらえるような内容となるようさらに工夫を行う。	(1)学生募集活動の実績 高校等訪問キャラバン隊、ガイダンス参加 (2)オープンキャンパス等の実施状況と参加状況 (3)最近の農大受験状況
		○ホームページ等による情報発信 ホームページの掲載年間200回 (養成部160回以上、研修部20回以上、その他20回以上) (R2実績:233回)	(1)学生の学習成果やトピックスのホームページやSNSによる情報発信 (2)受験希望者やその保護者に興味をもってもらよう内容の充実 【学科目標】 野菜学科:70回 花き学科:30回 果樹学科:30回 畜産学科:30回 (3)若者の視聴機会が増えるようなホームページのリニューアル。	【実績】 (1)・ホームページ等での情報発信数 計215回 野菜学科63回 花き学科38回 果樹学科29回 畜産学科31回 研修部23回 教務課31回 (2)ホームページは3月中にリニューアル予定。	(教務課長) ・情報発信回数については、目標を達成見込みである。 ・ホームページのリニューアルの目処が立ち、3月中に実施予定。	(教務課長) ・若者の視聴機会が増えるよう、ホームページのレイアウトを工夫する。 ・ツイッターの投稿回数を増やす。	特になし
		○マスコミ等を通じたPR回数 20回 (R2実績:15回)	(1)魅力あるイベントの企画、開催 (2)新聞やTV(サンサン、ひまわり含む)を活用した農大の魅力発信	【実績】 (1)TV等での魅力発信 20回(サンサン、ひまわり、FMながさき等)	(教務課長) ・コロナ禍の影響で中止になった行事があったものの目標回数の20回を達成することができた。	(教務課長) ・今後も魅力ある活動を企画し、継続してPR活動に努める。	特になし
2	実践教育による、社会に役立つ人材の育成 (養成部)	○日本農業技術検定2級合格者(割合%) 2年生取得者50%以上(16名) (R2実績:26%(6名))	(1)「園芸概論」「畜産概論」等基本的講義の理解度向上 (2)平素から問題集等で指導するなど受験対策の強化 (3)1年生は12月受験において、過半の者が全国平均点以上になるよう指導 (4)1年生に対し7月受験の働きかけを強化 【学科目標】 野菜学科:8名(うち取得済み2名) 花き学科:3名(うち取得済み1名) 果樹学科:3名(うち取得済み1名) 畜産学科:3名(うち取得済み1名)	【実績】 2年生の取得者:31%(10名/32名) 1年生の全国平均以上:23%(7名/30名) 【2年学科別取得者実績】 【1年全国平均以上実績】 野菜学科:4名(50%) 2名(25%) 花き学科:2名(66.7%) 2名(100%) 果樹学科:1名(33.3%) 3名(100%) 畜産学科:3名(100%) 0名(0%)	(養成部長) ・各学科において、テキストや過去の問題を活用しながら、理解度向上を図り、受験対策を行ったが、目標を達成することができなかった。 ・今年度は、予定通り7月と12月に実施されたが、学生に、農業技術検定2級合格に対する理解と意欲の向上を図ることができず、受験への準備が不十分となり、目標が達成できなかったものと思われる。	(養成部長) ・1年生において全国平均以上の学生が23.3%と低調であることから、早い段階(第1回)で合格できるよう受験対策の強化を図る。 ・農業技術検定2級合格の重要性を学生に理解させ、意欲の向上を図る。	R3農業技術検定の学科別合格者数
		○プロジェクト学習の内容充実 一定水準(70点)以上の発表 80%以上 (R2実績:87%)	(1)自主的かつ科学的な手法による栽培管理技術の習得 (2)確実な進捗管理の実施 (3)卒論中間発表会(9月)、卒論発表会(2月)の内容充実 (4)ルール電子図書館等を活用した最新技術情報収集 【学科目標】 野菜学科:14名/17名 花き学科:4名/5名 果樹学科:4名/5名	【実績】 一定水準以上の発表:100%(32名/32名) 【学科別実績】 野菜学科:17名/17名(100%) 花き学科:5名/5名(100%) 果樹学科:5名/5名(100%) 畜産学科:5名/5名(100%)	(養成部長) ・各学科において、計画通りに指導を行った結果、全員が一定水準を満たした。 ・しかし、九州農大プロジェクト発表会においては上位入賞に至らなかった。	(養成部長) ・次年度に向けて1年生のプロジェクトテーマについては、もう少し創造性、経営の視点、地域とのかかわりなどを盛り込むよう検討を行う。	R3卒論発表審査結果表
		○農家派研修の評価(35点以上の割合%) 受入農家からの一定水準以上の評価 1年生:70%以上(R2実績:78%) 2年生:80%以上(R2実績:91%)	(1)学生の特性をよく把握した上で農家とのマッチング (2)研修効果を高めるためコミュニケーション方法など事前指導の強化 1年生:8日間(6月) 2年生:30日間(10月) (3)客観的な評価方法での校内評価	【実績】 1年生(6月)8日間 受入農家の評価35点以上 30名中20名(66.7%) 2年生(10月)30日間 受入農家の評価35点以上 32名中23名(71.9%)	(養成部長) ・1年生は目標を達成したが、2年生は目標を達成できなかった。 ・1.2年生とも生活態度やコミュニケーション力が十分でない学生の評価が低かった。 ・2年生では、1年時に評価の低かった学生のコミュニケーション力向上をすることができなかったこと、就職等が決定した学生の研修意欲の向上を図ることができなかったことが目標を達成できなかった原因と思われる。	(養成部長) ・農家の評価が低かった1年生に対しては、コミュニケーション力をつけるよう指導を行う。 ・学生の状況を把握し、関係機関と連携しながら、受入農家の選定を行う。	R3派遣研修評価結果表
3	就農に向けた進路指導の強化 (教務課、養成部)	◎就農予定者及び農業技術者 80%以上(26名) (R2実績:87%) ○学生のインターンシップ人数 12名 (R2実績:9名)	(1)インターンシップ研修、農業アルバイトによる実践学習 (2)農業法人説明会への参加誘導 (3)農業関連企業とのマッチング会の実施 (4)県内JAの説明会の実施 (5)各地域就農支援センターとの連携強化 【学科目標】 野菜学科:14名就農 花き学科:4名就農 果樹学科:4名就農 畜産学科:4名就農	【実績】就農予定者及び農業技術者 94% 【活動状況】 (1)インターンシップ派遣 26人、農業アルバイト実践 0人 (2)農業法人、企業説明会を開催した。(7月)11法人・企業 (3)県下JA等説明会を開催した。(5月) (4)保護者懇談会を開催した。3地区(7月) (5)農業次世代人材投資事業の活用12名 【進路内定状況】自営就農10名、雇用就農7名、農業関連企業12名、その他1名 計30名	(教務課長) ・コロナ禍の影響で、中止した行事があったものの、多くの行事で内容を工夫して実施することができ、就農予定者20名(兼業就農3名を含む)、農業技術者10名(合計30名、94%)を確保し、目標を大きく達成することができた。 ・県内就農・就職率は94%と高い数字を維持することができた。 ・インターンシップに26名派遣することができ、当初の目標を大きく上回ることができた。	(教務課長) ・インターンシップの実施など進路に対する早めの意識付けと、保護者との情報共有に努め、一人でも多くの就農者および農業技術者の育成を図る。 ・次年度は目標レベルを上げて取り組む。	(1)卒業生進路状況
		○農作業安全研修会 開催回数 40回以上 (R2実績:40回)	(1)大特・けん引研修等における農作業安全指導(通年) (2)各地域への研修開催働きかけ(10～11月) (3)各地域での研修会の実施(2～3月)	【実績】 ・大特・けん引研修 30回 ・各地域での農作業安全研修14回 合計44回(110%)	(研修部長) ・昨年度と同様に大特・けん引研修の受講希望者が増加し、農家147名を次年度に繰り越し見込みとなっている。 ・コロナ禍で研修の働きかけは積極的にできなかったり、日程の変更等があったが、計画していた研修や依頼のあった研修を確実に実施することができた。	(研修部長) ・次年度も、大特・けん引研修希望者が多いと予測されるため、運転免許試験場と調整し、研修を2回増やす予定である。 ・農作業安全啓発のため、生産部会、集落営農法人をとらえ効果的かつ波及効果が高い研修を行う。	R3農作業安全研修開催実績(大特研修含む)
4	安全意識を持った農業機械利用者の養成とながさき農業オープンアカデミー開講 (研修部)	○オープンアカデミーの内容充実 アンケートで満足と回答80%以上 (R2実績:86%)	(1)受講者募集(4～5月) (2)開講準備(アンケート内容検討含む)(4～5月) (3)開講(6～9月) (4)アンケート結果とりまとめ(7～12月) (5)結果分析(12月) (6)問題点と次年度に向けた改善点の整理(1月) (7)次年度カリキュラム案の作成(2月)	【実績】 満足(10点満点中7点以上)と回答する受講生の割合 87%(108.8%) 【講座別実績】 オープン講座 73% 基本講座 95%	(研修部長) ・基本講座では、95%が満足と回答したが、オープン講座では、受講者が多いモーター会場でトラブルが発生したことにより、評価が低くなってしまった。 ・当初の受講生は15名であったが、途中で3名が受講を断念した。しかし、最後まで受講した12名は、全員が受講したこと満足であり、受講することをほかの農業者へ勧めたいと回答していた。	(研修部長) ・受講生アンケートや振興局担当者会、カリキュラム検討委員会等で得られた意見を参考に対象者である新規就農者、青年農業者の経営能力の向上に必要な内容を取り入れた次年度のカリキュラムを作成する。	R3オープンアカデミーカリキュラム及び出席者数 R3オープンアカデミーアンケート集計結果(満足度) R3オープンアカデミーアンケート様式
		○職場内コミュニケーションの活発化	(1)朝礼(毎日)、職員会議(毎月)の実施 (2)環境整備活動の実施(毎月) (3)挨拶の励行(3回/日・人)	【活動状況】 (1)定期的な職員会議と毎日の朝礼を実施した。 (2)環境整備は全体で毎月実施、加えて個別で実施した。 (3)挨拶は職員間や学生との間でも励行できている。	(次長) ・毎月の職員会議や毎日のミーティングに加え、毎月の環境整備により、コロナ禍で食等の機会が減少する中、職員間のコミュニケーションの円滑化を図ることができた。 ・また、学生や職員間の挨拶は自然な形で励行されており、会話のきっかけを作っている。	(次長) ・職場環境の向上には、コミュニケーションは不可欠なアイテムであるため、直接対話だけでなく、TEAMSやライン等の通信システムもうまく活用し、限られた時間を有効に使い、円滑な情報共有に繋げたい。	
5	健康で風通しの良い職場作りの推進 (総務課、教務課、養成部、研修部)	○モチベーションUPに繋がる柔軟な思考や知識の習得(2回以上/人)	各種研修の受講 (メンタルヘルスケア、ライフワークバランス、交通安全及び人権研修など)	【活動状況】 (1)人権研修などのべ30回実施。(2回以上14名/24名)	(次長) ・2月1日現在で、職員24名中22名が2回以上の受講を終え、自己啓発等の機会を設けることができた。残る2名についても年度末には2回以上の受講を見込む。	(次長) ・研修は回数よりも本人の土気や能力の向上に役立つことが重要であるため、個々の職務内容等を勘案し、個別に受講を促す。	R3受講回数集計表